

中国における東亜同文書院研究の現状

南開大学人事処副処長 周 徳喜

【大島】 大変寒い中、定刻にたくさんお集まりいただきまして、ありがとうございます。本日は周徳喜先生に、中国における東亜同文書院研究の現状ということでお話いただいて、若干の質疑応答をしたいと思います。

その前に、今私達が進めておりますプロジェクトの総責任者である藤田先生から簡単なお紹介とご挨拶ができればと思います。

【藤田】 みなさんこんにちは。愛知大学東亜同文書院大学記念センターは、去年東亜同文書院オープン・リサーチ・センターとして文科省から選定され、関係分野の研究も進めつつあります。今日はちょうど中国の南開大学から周先生が記念センターに来られておられて、もともと東亜同文書院の研究をされているということなので、中国における東亜同文書院についての研究史をお話いただけることになりました。よろしく願いいたします。

【大島】 どうもありがとうございました。それでは周先生のご経歴を、略歴を簡単にご紹介させていただきます。周先生は、1963年中国天津でお生まれになりました。そして、南開大学歴史学科をご卒業になり、ついで修士課程に進まれまして、1994年修士号の学位を取得されまして、その後1995年4月から1996年4月まで、ここ愛知大学で研修をされました。そして1999年9月から、南開大学歴史学で博士取得のための研鑽を積み、2006年12月博士号の学位を取得されまし

た。現在は、南開大学人事処副処長としてお勤めであり、同時に研究を続けられておるわけでございます。専攻のテーマは、大きくは中国近現代史でありまして、その中で今までここでは5編しか挙げられておりませんが、もっと他にもいろいろおありだと思いますが、論文を發表されました。例えば「日本東亜同文会と天津同文書院」、それから「甲午戦争前後、日本が上海に設立した学校」、「東亜同文書院の始末」、その他「『中日大辞典』と中日文化交流」といったものでございます。これらがちょうど私達がやっておりますテーマと合致しておりますので、今日はお話を聞きたいと思います。

本日通訳を担当されますのは、全般といえますか、報告の部分は暁敏さん、彼は現在中国研究科のドクターコースで、ドクター論文の準備をされておられる、と同時にこの東亜同文書院リサーチセンターのリサーチアシスタントでもあります。後半討論の部分は当センターのポストドクターの武井さんをお願いすることにしまして、早速ですが、周先生のお話を伺いたいと思います。よろしく願いします。

【周】 今日は多くの先生方にお集まりいただきまして、またこの機会を提供していただきましたことを本当に心から感謝しております。私の研究はこの場で発表するのは、ちょっと不十分です。ただ、今日の話の内容は中国の研究の現状、東亜同文書院の研究の現状と私の今後の研究の展望を含

めてということでお話をさせていただきます。

一、

大陸の学者による東亜同文書院の研究は、1990年代以前からいくつかあるのですが、だいたい個々の文章とか辞典の中で触られているものでして、主に東亜同文書院の紹介であり、本格的な研究とはいえないものです。真に同文書院を研究している人はごく少数です。私が知っている限りでは、90年代以前の東亜同文書院に関する文章は、1964年に吉宜康氏が『文史資料選輯』第17期に発表した「東亜同文書院について」であり、これは90年代以前に私が目にした限りでは、一番全面的で詳細に東亜同文書院を紹介した論文です。1980年に『辛亥革命史叢刊』に日本の森時彦先生の文章が「東亜同文書院の軌跡と役割—根津精神について」というタイトルで、中国語で翻訳されています。1994年に雑誌『歴史教学問題』第2期に、中村哲夫先生の論文を華東師範大学の謝俊美教授が翻訳した「孫中山と東亜同文会」があります。私の考えでは、1995年『档案と史学』第5期に発表された蘇智良教授の「上海東亜同文書院述論」が、私が見た90年代以降最初の東亜同文書院に特定した学術論文であります。しかし、愛知大学の成瀬さよ子さんの統計によれば、大陸において90年代で最初に発表された論文は董超文先生の「1900～1945年上海東亜同文書院」であります。私はこれを見ておりません。

蘇智良先生の論文は、比較的全面的に書院の全発展過程を紹介し、書院の設立、校舎の変遷、授業内容などを論述し、東亜同文書院に対する評価においては、書院が中日関係史上においては重要な役割を果たし、直接あるいは間接的に戦争に奉仕したとしております。論文は大旅行が残した貴重な資料は、当時の政治、経済、文化、地理、民俗、人口、貿易などを研究する者に対して、多方面にわたり重要な資料価値を有しているとしています。書院の成果は多くの中国通、中国の専門家

を輩出したことにあります。例えば、根岸信、小竹文夫、大村欣一、鈴木擇郎、馬場敏太郎などの学者です。

この論文以降、中国内における東亜同文書院の研究が増えはじめました。1997年1月、単冠初先生が「東亜同文書院の政治的特徴試論—西洋ミッションスクールとの比較」という一文を『档案と史学』第1期に発表しております。彼は、日本の学校である同文書院と西洋の教会が中国で設立した大学の比較をただだけでなく、書院の全体的な発展過程において日本の官側が大いに物心共に支援したことと不可分であり、書院の行く方向と日本の対中国政策とは密接に関連していた。しかしミッションスクールと国家とは一般の住民、個人団体と政府の関係であり、政府と特別な関係ではなく、特別な義務を負っていなかった。しかし同文書院は中国の官民との関係が初期において密接で、中国の官民は東亜同文書院に対して、初期、中期には大きな便宜をはかったこと、たとえ反日運動の高潮があっても、一部の親日派が書院と密接な関係を維持していたこと、これに対してミッションスクールと中国官民との関係は冷淡であったこと等々、この論文の中で東亜同文書院がミッションスクールより受けがよかった原因を分析しております。

1998年、中国社会科学院の房建昌先生が『档案と史学』第5期に「上海東亜同文書院（大学）資料の発見及びその価値について」という論文を発表し、両国の同文書院研究の状況を簡単に回顧し、同文書院と愛知大学の淵源について略述しております。論文は重点的に、本人が発見した一千点の国家図書館所蔵の同文書院資料（1938年～1943年）の稿本、校務資料および学生の卒業旅行日記と調査報告を紹介し、この資料の同文書院研究における価値を論じております。1997年雑誌『蘭台世界』に「日本帝国主義の開設した上海東亜同文書院」が発表され、同文書院は中国文化侵略と中国侵略の尖兵だとしております。2001

年『档案と史学』第2期に陳祖恩先生の「早期上海日本居留民と文化活動」が発表され、文中で同文書院にも言及しています。2002年『史学月刊』第9期に「上海東亜同文書院と近代日本侵華活動」が発表され、中日関係の新視点から東亜同文書院設立の背景、歴史活動および危害について検討を加え、同文書院は特殊な学校で日本政府との関係は密接であり、日本政府の支持と管轄を受けていた。学生は旅行調査の名目で長期にわたり中国で活動し、中国の政治、経済、軍事方面の情報を集め日本政府に報告した。中日戦争の期間を通じて学生は従軍通訳や偽政府機関に勤務して、直接日本の中国侵略に加担した者もいた、としています。

2007年12月2日、上海『文匯報』の「上海の早期における外国語新聞」の中で、東亜同文書院に言及されております。その他、上海復旦大学に留学中だった薄井由さんの『東亜同文書院大旅行研究』に対して、少なからぬ書評が薄井さんの観点に反対しました。うち代表的なものに何琅先生の発表した「たくらみをもつ研究—東亜同文書院大学大旅行の研究を読んで」があり、その観点は趙文遠博士に類似しています。

武漢大学の著名な教授である馮天瑜先生、彼は愛知大学の現代中国学部で教鞭を執っていました。近年、積極的に東亜同文書院、特に大旅行に関して関心をよせ、研究をしています。馮先生の書かれた「東亜同文書院の中国調査について」では、同文書院の創立の背景、過程および中日全面戦争以前の中国との友好関係について略述されています。彼はこの論文の中で部分的に東亜同文書院の教員、あるいは学生が中国人民の抗日戦争を支持し、中国の抗日活動に参加し、日本の軍国主義政策に反対したとはいえ、全体的には東亜同文書院は日本政府の大陸政策に関連しており、書院は設立当初から文部省と外務省が共管し、また軍部とも関係が密接で、以来、直接内閣の管轄下にあった。東亜同文書院が約半世紀にわたって維持されてきたが、必然的に日本政府の対中政策の

制約と向背を受けた。近代中日関係上の大きな出来事と関連があり、特に中日戦争中、同文書院生の学徒出陣と従軍通訳は事実上、書院が直接日本の中国侵略戦争に参加したことになる。40年余の大旅行調査活動は深く大陸政策が烙印されていた。馮論文は、東亜同文書院学生の中国大旅行調査に対して具体的に分析する必要があり、一概に論ずることはできないということ述べております。2001年1月、馮天瑜主編、楊華等の訳で『上海東亜同文書院大旅行記録—近代日本人禹域踏査書シリーズ』が出版されました。この資料は、多分中国における初めての東亜同文書院に関する資料であります。2002年『中山大學學報』第1期に桑真教授の論文が発表されております。この論文は、東亜同文会広東支部について論述しており、文章の中で東亜同文書院についても言及しております。

以上述べたとおり、現在中国における東亜同文書院に関する研究はまだ始まったばかりの段階で、書院について研究する人も増えつつあります。しかしながら資料が限られておまして、日本の学者と比べると、とりわけ愛知大学の藤田教授をはじめとする東亜同文書院の研究者と比べると、大変遅れております。主として系統的な研究が少なく、個別テーマ研究が多く、特に大旅行研究が多いが、僅かに自分の手元にある資料による研究ばかりであります。このため読む価値があるものは非常に少ないのであります。現在中国大陸にある東亜同文書院関係の資料は主に復旦大学、南開大学、中国社会科学院および国家図書館にあります。その他、一部の省市の図書館にも索引上は記載がありますが、実際にあるかどうかは確認できないのであります。以上は私個人の研究上の困難であるのみならず、大陸の研究者が深く研究できないことのキーポイントでもあります。

以上紹介しました東亜同文書院に関する論文を書いている研究者は、全員日本留学の経験者であるか、かねてより研究したいと考えながら資料に

よる苦しんでおり、ちょうど、日本訪問や交流で行った時に関係資料に触れて研究心にかられたのであります。蘇先生は日本で資料を探し、これをまとめて論文にしました。単先生は今もう日本におります。房先生は東亜同文会など興亜団体の研究の中で、国家図書館収蔵の東亜同文書院の資料を発見されました。馮先生は特に日本、中でも愛大によく来られる先生です。桑真先生は学术交流で日本に来た時に、東亜同文会広東支部について研究した方です。趙文遠博士も日本に留学した際に、偶然東亜同文書院の資料を見て研究をはじめられました。吉宜康先生は上海同文書院の中華学生部の卒業生です。薄井由さんは主として日本で資料を探して大旅行研究を完成させました。中国社会科学院の汪奇生さんも愛大で学术交流をして、東亜同文書院の研究をされています。私も愛知大学に一年間留学して『中日大辞典』、あるいは愛大と東亜同文書院研究をするようになったのであります。なお、私がここで紹介しました研究現状は、日本に留学して日本語で発表した論文、例えば、翟新先生などのものは含んでおりません。

二.

次に、私個人の最近の論文発表について申し上げます。まず2003年に南開大学日本研究論集に「中日大辞典と文化交流」を発表しました。この中では主に文化交流の角度から、『中日大辞典』が誕生した背景、製作過程と中日文化交流における役割について論じました。これは愛知大学に留学した際に、今泉先生の大学院中国研究科での講義に出席して、得たものがきっかけとなりました。2003年には『広東社会科学』第6期で「甲午戦争前後の日本の上海における学校経営を論ず」を発表し、東洋学館、日清貿易研究所と東亜同文書院について紹介し、主に東亜同文書院を中心に述べております。2004年『歴史教学』第5期に「日本東亜同文会と天津同文書院」を発表し、主に東亜同文会が天津に設立した天津同文書院と、上海

の東亜同文書院に併設した中華学生部の原因を検討し、天津同文書院の創設過程、発展過程と結末について論じました。2004年『蘭州大学報』第5期に「東亜同文書院始末」を発表し、書院の沿革、背景、変遷と結末の過程について論述しました。

2005年『南開大学日本研究論集』に「荒尾精と彼の在華活動」を発表しております。その主な内容は、荒尾精および彼が設立した漢口楽善堂と日清貿易研究所の過程について述べ、漢口楽善堂のメンバーの中国における調査活動、日清貿易研究所の日清戦争に果たした特殊な役割について論じました。2005年「梁啓超と近代中国社会文化」という国際シンポジウムで、「戊戌政変前後の梁啓超と東亜同文会との関係について」を報告しました。その中で梁啓超が東亜同文会の支援の下に日本に逃れることができ、日本で実地調査を通して彼の対日間が変化したことについて発表したのであります。天津の『今晚報』という新聞に東洋学館、漢口楽善堂について短い文を発表しました。現在は前述の3論文を改定中で、まもなく完成します。一つ目は根津一と東亜同文書院、二つ目は東亜同文会と書院、最後に東亜同文書院の中日関係における地位という3論文であります。最後に、私の博士論文はいま改定中で2009年に出版する予定です。今回の愛大の短期訪問は、たくさん資料を収集して、博士論文の補足と改定をすることが目的であります。

三.

私の博士論文について、簡単に紹介いたします。

1994年1月、私は歴史学修士号をとり、同年愛知大学で1年間研修しました。研修分野は近百年来の中日文化交流です。今泉教授のご指導を受け、95年に過程を終えることができました。その間、愛知大学と中国の文化交流に対して関心が起きました。理由は二つあります。一つ目は今泉先生の影響であります。今泉先生が私に『中日大辞典』の歴史について話をされましたが、より話

題になったのはやはり中国のことです。二つ目は『中日大辞典』そのものの影響です。愛知大学に来て、はじめていただいた貴重な贈り物が、この『中日大辞典』でした。『中日大辞典』自身が中日文化交流のひとつの縮図ではないかと思い、したがって私は『中日大辞典』を突破口として中日交流を研究しようと思いました。個別研究としては中国と愛知大学との文化交流とし、そのために愛知大学で若干の資料を集め整理しました。1996年帰国後、中国国内にはこういう方面での交流の資料は非常に少ないことが分かり、より深く研究を進めることができませんでした。私は研究の重点を愛知大学の前身である東亜同文書院へと移しました。ちょうどこの頃、今泉先生が南開大学を訪問されたので、私は今泉先生に私の研究計画を話し、支援を得ました。先生は、帰国後、資料を1箱送って下さり、これで研究の基礎も固まりました。これらの資料の中には多くの藤田先生の著作も入っていました。これらの研究の基礎ができた段階で博士論文のテーマを東亜同文書院の研究に決めました。

〈論文について〉

2006年7月論文は完成し、11月口述試問ののち、歴史学博士号を取得しました。論文は序論で、主に国内外での同文書院研究概況の紹介を行ない、テーマとして選んだ意義を述べております。次に東亜同文書院と上海の関係を述べております。日本と上海の特殊な関係、日本が上海に開設した東洋学館、楽善堂、日清貿易研究所であります。次は東亜同文会と同文書院で、主に東亜同文会の設立の背景、経過、その文化事業および書院に対する管理などについて述べました。その次は東亜同文書院の経緯であります。全面的かつ詳細にその背景と過程、校舎の変遷、内部の変化、学生の増大などを論じました。その次は書院と中華学生部です。中華学生部を設立した背景、目的とその結果、中華学生部の書院の中での地位と果たした役

割、その廃止、中国人学生と日本人学生との関係などについて述べております。その次は根津一と書院についてです。主に根津一の生涯と中国における活動、主に書院の発展過程の中で果たした役割、その教育思想が如何に書院と学生へ貫徹され、根津精神がまた如何に書院の発展に影響を与えたか、日清貿易研究所の手法を参考としたのはどの部分か、時代と環境の変化の影響を受けて彼の思想がどういうふうに通文書院に新しい発展をもたらしたか。その次は学生と書院であります。書院の主体は学生であり、授業の他に課外活動はどのようなであったとか、学生と管理者の間の関係はどうだったのか。ストライキ事件が発生した深層原因は何だったのかについて論じました。その次に大旅行と書院についてであります。最も重要な活動、最大の目的は大旅行で、この発展過程や学生を見た中国、また大旅行はそれぞれの時期にどう変化したのかを論述しました。その次に東亜同文書院の中日関係における地位についてであります。馮天瑜先生が述べているように同文書院は特殊な学校であり、世界教育史上でも特有な学校であります。書院が当時の中日関係からはずれて独立して存在することができないのであり、当然の如く中日関係と密接不可分であります。書院の学生は間接的あるいは直接的に日本の中国侵略戦争に参加しました。これは『東亜同文書院大学史』の中に記載されています。戦争反対の教員や学生はいましたけれども、これは主流ではありません。書院の大旅行調査は大量の資料を残しており、当時の中国を研究する上で大変意義のあるものであります。

〈今後の想定〉

これから中国に戻ったあとに、短期的には論文に一定の補充と修正を加え、関連する内容を増強する必要があります。例えば上海と東亜同文書院との関係を中国の政府・民間と東亜同文書院との関係に広げること、東亜同文会と書院との関係を日本の官・民間と書院との関係に広げること、そ

れから東亜同文書院の教師、カリキュラム、学生の就職について分析をすることです。長期的には、むしろ東亜同文書院は私のメインの研究ですから、一生をかけて書院研究をしていきます。ここでの20日間という短い期間では、いろいろな収集や、あるいは他の面から見ても、もちろん時間が足りなかったです。さらに残念なことは、藤田先生や他の先生方の指導を受けることができなかったことです。まだ資料の収集にももっと長い時間が必要です。私は愛知大学と藤田先生ら諸先生のお力で、再度愛知大学で研修する機会を与えて下さり、ぜひ親しくご教授下さるようお願いいたします。私も日本語をさらに勉強すると共に、今後も交流を積極的に行ない、研究資料も集めていきたいと存じます。

〈感謝の言葉〉

最後に、感謝の気持ちであります。前回と比べると感じがまるで違います。今回は極めて短期間でしたが、収穫は大変大きかったです。特に藤田先生、今泉先生などの著作を読むことで大いに勇気づけられました。藤田先生の著作は時間的な関係で細かく読めませんでしたけれども、中国に持ち帰って詳しく読むことによって、藤田先生から間接的な指導を受けたことになるでしょう。

最後にこの場をかりて、日本学術振興会の賛助、愛知大学が提供して下さったいろいろな便宜に感謝申し上げます。今泉先生、藤田先生、三好先生に感謝申し上げます。武井先生、研究支援課の山本さん、図書館の成瀬さんにも感謝いたします。その他いろいろと力になって下さった方々にお礼申し上げます。今後、より一層研究成果を上げることが先生方に対する最大の感謝の気持ちになると思います。本当にどうもありがとうございます。最後に皆さんが南開大学にいらっしゃることがありましたら、感謝の気持ちで皆さんをお迎えしたいと思います。

以上です。どうもありがとうございました。

【大島】 どうも、周先生長時間お話ありがとうございました。話はいろいろと多岐に渡っておりますので、せっかくの機会でございますから、若干質疑応答をさせていただきたいと思います。

質疑応答

【大島】 それではですね、周先生は明日お帰りで、連日大変ご苦勞おかけしますが、せっかくの機会ですから、質疑の時間を少しいただきたいと思います。

お話はまず中国における東亜同文書院研究の学説史と申しますか、そういうお話がありました。1990年代以前と以後にわけてお話がありまして、そのあと周先生自身のこれまでの諸研究について報告があり、そして最近出されたドクター論文の内容についてご紹介がありました。そして最後に今後の研究についてお話がありました。

私はこの問題についてはあまり専門的にやっておりますので、皆さんのほうからご自由にご質問なりご意見なりを頂戴したいと思います。

【今泉】 特に藤田先生がおられるので、さっきのお話のように、直接ご指導を受ける機会がなかったということから、ぜひ藤田先生の方から質問というか、発言していただければ非常にいいと思います。

【藤田】 ではいくつか。今日のお話は中国の研究動向として、大変参考になりました。そのうちのある一点ですけども、日本もそうですけど、中国でも東亜同文書院の問題は、まずこれは大きな問題ですけども、日中間という問題に限定されるケースが非常に多いんですね。ただ最初にその書院の設立の問題を考えますと、東亜同文会そのものの性格からみても、やはり当時の東アジア情勢、それが非常に深く関わっていると思います。とりわけ明治の段階では日本は中国を通して、列強のアジアに進出というものに非常に脅威を持っていたということがひとつあります。そういう点で、

当時日本は列強の東アジア進出に対してですね、何とか食い止められないか、対抗策はないかということを探索していた時期だったんですね。それは世界史の流れの中でいうと、近代史以降いわゆるヨーロッパ中心の、いわゆるオリエンタリズム風の考え方、つまりアジアのほうがヨーロッパよりも劣っているという、そういう発想に対して例えば根津さんの文献を勉強しようという話があったんですが、根津さんの思想の中には、中国、それから隣の朝鮮とチームを組むことによって、つまり3つの地域ぐらいを連携することによって列強に当たれるんじゃないか。まあ言ってみれば、日本も欧米思想に傾きながらその一方では欧米とどう対抗するかみたいな、そういう思想は当時あったと思うんですね。したがって東亜同文会はそのために、日本をベースにしながら朝鮮とか中国で、まずやはり貧しさ、それをどういうふう克服するか、それにはまず教育がやっぱり重要だというわけで、それで教育事業を始めた経過があるんです。

そういう意味で言いますと、ヨーロッパ中心の世界がアジアへ広がってくる中で、見方を少し変えますと、東亜同文会および東亜同文書院の最初のスタートというのは、オリエンタリズム、今オリエンタリズムって言いますが、ヨーロッパ中心で東アジアその他は皆レベルが低いっていうヨーロッパ中心の見方に対して、最初のアジア中心で何か思想的、文化的な対抗ができないかという発想が原点にやっぱりあったと思うんです。そのために中国とどういうふう、あるいは朝鮮とどういうふうに関わって提携していくか、そのへんのところ連携プレーでもってアジアへ、さらに世界へ台頭していきたいというのがあったと思います。これは最初の段階です。

したがって、われわれが書院を見るときは、比較的限定的に日本と中国の問題というふうに狭い範囲で見てしまうんですけど、その最初の発端は非常にスケールの大きな発想があって、荒尾とか

根津の王道思想はそういう考え方がベースにあったと思うんです。これは荒尾が中国に行って、列強がどンドン出てきているっていうことに対する危機感が当時実感としてあったんじゃないでしょうか。それでそういう新しい発想を生み出していったのではないかと。繰り返しますが、それが最初の原点としてあったと思うんですね。

だから各地にいろんな学校を作ったりとか、書院の開設でいわゆる日中間の貿易実務者を養成するというのは、教育ともうひとつ経済の両面でもって基盤を作っていくという発想があったと思います。

一方、朝鮮に関してはそのあと日本の植民地になってしまったものですから、その朝鮮に関しての教育活動というのは、国の体制の中でやるようになっていったわけです。したがって、日本と中国の関係の中で書院の活動が、教育事業と日中間のいわゆる経済関係に絞られていって、そこから先の1930年代後半からは視野が少し狭くなっていったところがあります。それはなぜかといえば、そこは今日の発表であったように日本政府の関わりと申しますか、とりわけ外務省が東亜同文会に資金を出して援助する中で、少しそのへんが最初の大きな構想が少しずれていったと思うのでしょうか、そういうことだったのではないかと思います。

だから、欧米の研究者も東亜同文書院に関して非常に強い関心を持っていますけれど、これはひとつはやっぱり欧米に対して東亜同文書院が中国とつながることによって、大きな力を持ってきた。対欧米戦略というのでしょうか、それに対するある種の危惧というか、そういう発想が欧米の多くの研究者を惹きつけた、そのほかにも書院の中国や東南アジア研究などいろいろ関心を持ったと思います。

そういう意味で言いますと、我々は日本と中国だけの関係で書院を見がちですけど、元来、書院と東亜同文会はもっとスケールが大きくて、世

○

界的なスケールの中で対欧米戦略みたいなものを考えて、日中間の連携を目指してスタートしたんじゃないかと思うんです。したがって、特に中国の方が研究される時に、中国への侵略がすぐ冒頭にきてしまうんですけど、もともとはそうでなくて、もっと外側の世界という、もっとスケールが大きくて、そのために中国とどういふふうに向き合って、あるいはお互いのコネクションを作っていくか、というあたりのところがベースにあったところにも関心を持っていただきたいですね。だから発想の視点をひとつ外側に置くと、ずいぶん東亜同文書院に対する研究が大きくなるし、書院が世界史的な存在になる。これは欧米の研究者はもう気がついている。我々もですが、中国の研究者の方はですね、そのへんのところは少し視点を広げて見ていく必要があるんじゃないかなという気がします。

ですから、清朝末期の政治家とか民国期の政治家が、東亜同文書院に非常に親しみを感じていたその背景のひとつは、清朝あるいは民国が置かれていた当時の状況を見ればわかるのですが、やはりそういう大きな発想に対して非常に書院や東亜同文会とつながってこうというような、あるいは書院や東亜同文会を評価したいという背景があったんじゃないでしょうか。

そういう傾向がずれてきたのは、満州事変以来日本の軍部が満州を支配し、やがて中国と戦争するようになってしまったから、その中に書院の一部が組み込まれてしまったところがあったためなんですね。だから我々が物を見る時にそこからだけを見ると、書院の悲劇的な側面しか見えなくなるんですけど、出発点の視点から見ると、ある意味歪曲化されてしまったところがあって、これは両国にとって非常に悲劇的なことでありますけど、もともとはもっとスケールの大きな発想というのがあって、もし軍部の行動がああいうふうでなかったらですね、もう少しいろんな視点から東亜同文会、あるいは東亜同文書院と中国との

関わり合いをもっと深めたんじゃないかと思うんです。

そのひとつが「大旅行」だったと思うんですけど、これももともとは東亜同文会、書院のほうもお金がなかったから実施できなかったんですね。だから「大旅行」は戦略的に行なわれたわけではないんです、最初は。したがってそれが実施されるようになって、学生達は調査地を選んだり、調査項目を設定したりすることをかなり自由にやっています。調査項目に関しては多少馬場先生とかの指導があったと思いますが、結果的に大旅行は基本的には学生の自由意志によって行なわれたんですね。例えば柔道部などの体力の元気な人達は、一番奥地まで競っていくとか。そういうような学生達ですから、学生の立場からいうと、なるべく日本人が行ってないところへ行って物を見てきてやろうという好奇心だったわけです。だからそれは見方がいろいろありますけども、結果的には中国の情報収集という視点をくつつければ確かにそうでしょうけど、旅行というのは皆そういうことをしなければ旅行できません。旅行したことのない研究者の観念論でもあります。学生達にとってみれば自分達の計画でもってやった。ただその報告書を軍のほうが見たいと言う、そういうことはあったにしても、基本的には学生達が自分達のプランにしたがって、先輩から後輩へ代から代へと受け継ぎながらやっていったんですね。主体そのものはかなり純粋だったんです。そのものの評価に対しては、いろんな条件が次第にくっついてくるといろんな見方があるんですけど、戦略的に行なわれたとはちょっと思えないところがあります。だから学生達はあんなに純粋に、いろいろ観察したことを書きまくったりしたところがあるのですね。

大旅行を指導した馬場先生は地理学の先生なんです。私も地理学ですけど、地理学はイデオロギー性を持っていない、だからああいう調査をかなり万遍なくやれる。だから、馬場先生が辞められ

たあとは多少は違うかもしれませんが。馬場先生が指導されていた時代は研究者も、そして時に軍部も使えるような優れた、まだ多くの人知らない世界の調査をしていたというふうには見えています。後半は大学に昇格したりしてからは少し違う。

日本でも、ベルリンの壁が崩壊するまでは、イデオロギー的な中で東亜同文書院をそのように見てたんですが、これは研究をせずに、イデオロギーとして見てたところがありました。それがベルリンの壁が崩壊してから書院の史料をベースにして、やっぱりきっちりともう一回位置づけていこうという動きが出てきたわけです。これは大きな転換です。中国の研究者の方も、今までは我々が外側から見ててもやはり少しイデオロギー優先的だったと思うんですね。それが周先生のように、史料をベースにして物を言っていこうというふうには中国の研究者も大きく変わってきたというところが、非常に我々としても評価できると思います。そのへんのところは共同でこれから何かいろいろ研究していく上で、共通の土台ができるのではないかなというふうに思っています。

だいぶ時間をとりましたので、大きなお話はそのぐらいにします。細かいのはいろいろありますけれども。

他の方からもどうぞ。

【広中】 こんにちは。私は大学院中国研究科で、日中戦争を研究しております広中と申します。

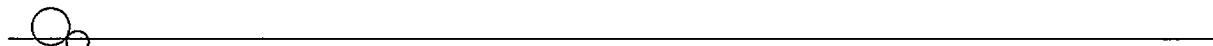
周先生が先ほど東亜同文書院の研究の現状ということで発表されましたけれども、その中で2000年の研究あたりで、陳祖恩先生の研究のところと同文書院と中国侵略との関係について述べられましたが、それ以前の研究では侵略といったような説明がなかったんですね。そうすると、この2000年を境にして、中国侵略と同文書院の関係というのが注目されたのかなというのを私は感じたのですが、それはそういうことなのか、もしそういう変化があったのであれば、なぜその時点で中国の侵略と同文書院の関係が中国で研究さ

れはじめたのかについてお尋ねします。

【周】 2000年以前でも2000年以降でも、中国侵略との関係という点で同文書院研究は発表されています。同文書院の学生自体は侵略とかそういう感覚はなく、特には関係なかったんですけども、日本政府が中日戦争を始め、中国侵略を進め、侵略政策を進め東亜同文書院にいろいろと圧力をかけたところで、結局そういうことになってしまった。だからご質問の回答としては、2000年以前でもそれ以降でも中国侵略と同文書院というのは不可分の関係であるという見方が中国ではあるということなんです。

【今泉】 歴史認識としては、具体的な資料によってなされなきゃいけない。今中国では例えば東亜同文書院大学についても、断片的なものしか出ていない。そういうものだけを見て、個別の論文が書かれているように思う。やはり周さんの主張だと思うんだけど、具体的な歴史事実から同文書院は離れることはできない。これはもう当然のことです。だからそういう中で見る以外にはない。それは学徒動員であれ、従軍通訳の問題であれ、日本政府の上海総領事館、つまり外務省を通したところと密接な関係を持つ、これも離れがたい。認識はもう非常にはっきりしている。実際の歴史事実と、資料との関係でいえばそれはそれできちっとしておかねばならない。周さんは現代中国学部にはいた馮天瑜教授の大旅行に関する見解には、自分も賛成だとさっき述べられましたね。具体的な個別的な段階段階で、事実をきちっとみていく必要がある。一概にばっさりと論ずることはできないと。

【大島】 名残り惜しいのですが、先ほど今泉先生からも注意がありましたように、周先生は明日帰国なさいます。あまり引っ張り回すことができませんので、名残り惜しいですが、そろそろこれにて閉会させていただきたいと思います。今後とも、研究交流を続けていきたいと思いますので、こちらからもいろいろ研究が出ますから、お送りしま



すと同時に、周先生もいろいろのこと書かれましたら、その刷りでも、本でも、いよいよ本が出るわけですから、それを是非お送りいただきたい

と思います。本日はどうもありがとうございました。(終)